

## 令和5年度 不登校支援研究校 報告書 祇園小学校

## 1 学校の課題

※データ等を基にした学校の課題

本校は児童数が1000名を超える大規模校である。そのため、不登校の前兆が見られる児童の実態を早期に把握し、支援や対策を講じることが難しい場合があった。また、不登校傾向にある児童や家庭については、現状の把握はしているものの、どの児童にも最適な支援ができていたとは言い難い。その原因として、学級における生徒指導上の問題について、担任のみが対応してその情報が共有されにくかったことが挙げられる。情報共有が遅れることによって組織的な対応も遅くなり、児童は不安な思いを持ったまま学校生活を送ることとなり、徐々に登校することが難しくなっていくケースも考えられる。また、登校はしているものの、教室での学習や他の児童との人間関係に悩みを持っていたり、教室にいること自体が辛いと感じていたりしている児童に対して、その現状を把握し、児童一人一人に合った支援をすることを担任だけに求めることは非常に難しい。そのため組織運営を再考し、児童に必要な支援ができる体制の周知・徹底が十分ではなかったことも考えられる。

全ての児童が安心感を持って、自分の居場所を感じながら学校生活を送るためには、これまで以上に児童理解を進め、それぞれの児童に最適な支援ができる体制を整えていかなければならない。そのために、児童の実態把握を方法や支援のあり方についてもう一度見直し、実践していくことが求められる。

## 2 研究主題

「児童一人一人の居場所づくり

～小中学校9年間を見通した学習支援と温かな人間関係の構築」

## 3 重点取組

※1の課題解決に向け、重点的に取り組む項目

- (1) 児童の実態把握と組織的な対応についての周知・徹底
- (2) 児童の居場所づくりのための取組の実施
- (3) いじめ・不登校等予防的生徒指導の実践

## 4 具体的な取組

※3の具体的な取組

## (1) 児童の実態把握と組織的な対応についての周知・徹底

## ① 児童連絡会による情報共有

毎週火曜日に教職員全体での児童報告会を実施した。低学年・特別支援学級ブロック、中学年ブロック、高学年ブロックの3ブロックに分け、毎週1ブロックの児童について報告を行った。

報告では不登校だけではなく、その他の問題行動（暴力行為・いじめ・特別な指導等）も報告をするようにし、児童の様子を多面的に把握できるようにした。

#### ② 配慮を要する児童に関する情報共有

年3回（5月・10月・2月）に、要配慮児童報告会を実施し、特に配慮を要する児童について、その背景や対応について共有し、全ての教職員が同じように対応できるようにした。

引継ぎシートで具体的な記録を残すことと合わせて、「配慮を要する児童一覧表」にも児童の様子子の記録を詳しく残し、確実に引き継ぐことができるようにした。

#### ③ 学校生活アンケートによる実態把握

年間3回、いじめに関する学校生活アンケートを行い、学校生活の中で、児童の不安や悩みの実態を把握した。内容に応じて担任が児童と面談を行い、詳しい状況や思いを聞き、解決を図る。また、必要に応じて学年主任や生徒指導主事、管理職も関わり、できる限り児童の不安感を取り除くことができるようにした。

#### ④ 組織的な生徒指導を実践するための校内研修の実施

年度初めに、校内生徒指導体制についての研修を行い、共通理解を図った。生徒指導規定、生徒指導方針、いじめ防止等のための基本方針、校内いじめ防止対策、不登校対応マニュアル、問題行動対応及び危機管理マニュアルについて、書面と合わせて資料・スライド等を用いて周知徹底した。

### (2) 児童の居場所づくりのための取組の実施

#### ① ふれあいひろばの支援の充実

教室で他の児童と一緒に学習をすることが難しい児童や、不登校からの復帰を目指している児童にとって、校内での居場所の一つとなるよう、明るく温かい雰囲気を受け入れられるふれあいひろばを目指して体制を整えた。

教室で学習することが難しい児童については、ふれあいひろばを拠点として学校生活を送ることができるようし、一人一人にあったペースで教室への復帰を促した。教室へ行くことに不安を感じている場合には、ふれあい推進員が付き添い、心への負担を軽減できるようにした。また、児童の実態に応じて、生徒指導主事が面談を行い、児童自身が希望とするライフプランに沿って短期的な目標を一緒に決め、見通しを持って生活できるようにした。

ふれあい推進員と生徒指導主事の連絡を密にし、一人一人の支援の仕方について共通認識を図り、いつも同じ支援ができることにより、児童の安心感が生まれるようにした。

#### ② 学習支援の体制づくり

学習に不安があることで、教室や学校にすることが難しくなる児童への支援として、学習サポーターによる学習支援の体制を整えた。支援が必要な児童や学習について、担任からの要請を週単位でまとめ、学習サポーターを配置することで、効果的な学習支援ができるようにした。また、ふれあいひろばにおいても、児童の実態に合わせて担任からの課題に取り組んだり、タブレットを用いてオンラインで授業を受けたりするなど学習を進める体制を取り、教室への復帰を目指すときに学習の遅れができる限り不安要素にならないよう努めた。

### (3) いじめ・不登校等予防的生徒指導の実践

#### ① MLB教育の充実

児童のコミュニケーション能力の向上を図るため、5・6年生においてMLB教育を重点的に行った。5年生では、体育科保健領域の心の健康で、身近な大人がしているストレスへの対処法についてまとめる学習を通して、ストレスとの向き合い方を身に付けさせた。6年生では、特別活動でアンガーマネジメントについての学習を実践的な内容で行い、自分なりの怒りのコントロールの方法を実践できるようにした。

MLB教育を充実することで、友達との関わり方を学び、人間関係を円滑にしていくことで、児

## 5 検証結果

※検証方法および結果

指標	達成目標	検証時期・方法
①学校生活アンケート	いじめ見逃し 0	6月 11月 学校生活アンケートの集計 いじめ解決事案の確認
②ふれあいひろば利用アンケート	居場所についての肯定的評価 80%以上	年度末
③MLB教育についてのアンケート	怒りに対する具体的な対処法 の実践80%	1月

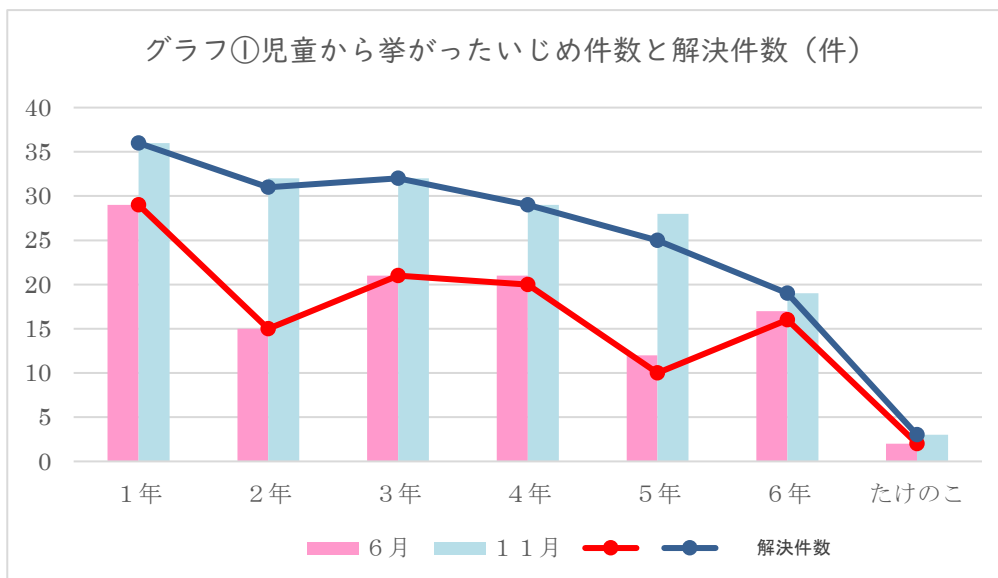
## 【検証結果】

## ① 学校生活アンケート

学校生活アンケートにおいて、児童から挙げたいじめを疑われる案件について、その件数をまとめると、以下のような結果になった。(表①, グラフ①)

表① 児童から挙げたいじめ件数と解決件数(件)

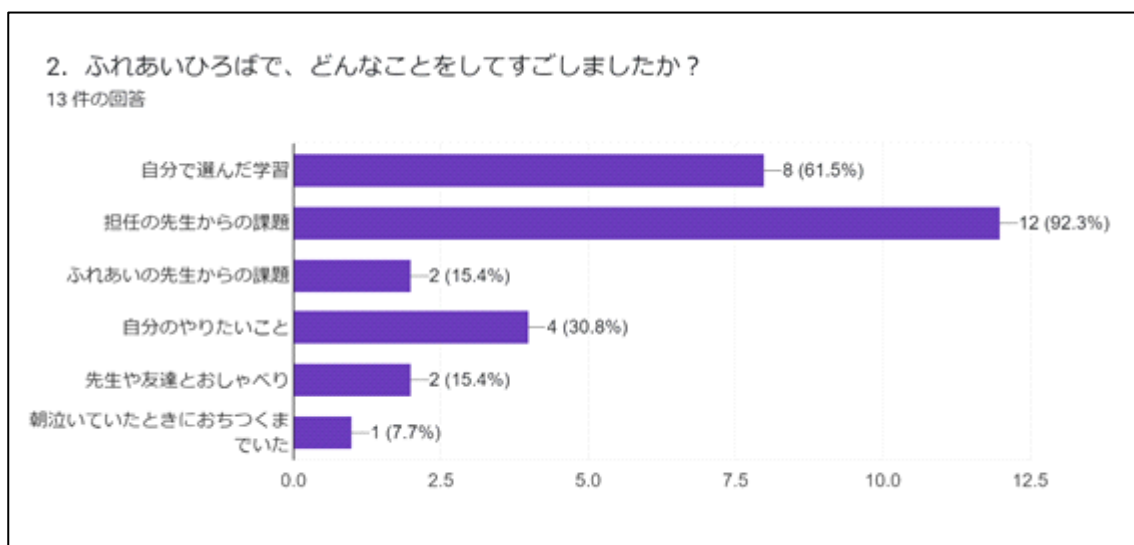
	6月			11月			増加率
	いじめ (件)	解決 (件)	解決の割合 (%)	いじめ (件)	解決 (件)	解決の割合 (%)	
1年	29	29	100%	36	36	100%	1.24
2年	15	15	100%	32	31	97%	2.13
3年	21	21	100%	32	32	100%	1.52
4年	21	20	95%	29	29	100%	1.38
5年	12	10	83%	28	25	89%	2.33
6年	17	16	94%	19	19	100%	1.12
たけのこ	2	2	100%	3	3	100%	1.50
全体	117	113	97%	179	175	98%	1.53



この結果から、6月よりも11月の方がどの学年も件数が大幅に増加していることが分かる。この理由として、対象期間の長さ、児童相互の関わり合いの増加・深化、担任との信頼関係が深まり伝えようとする児童が増えたことの3点が考えられる。また、6月、11月ともほぼ解決しており、児童の不安感を取り除く取組ができていたと考えられる。解決されていない案件についても、当該児童が相手に知られたくない、先生に知っておいてもらうだけで良い等、直接的な解決を望まなかった件であることが確認できている。いじめにつながる可能性のある日ごろの児童のトラブルについて、多くの事案を把握し、早期に解決できたと推測できる。

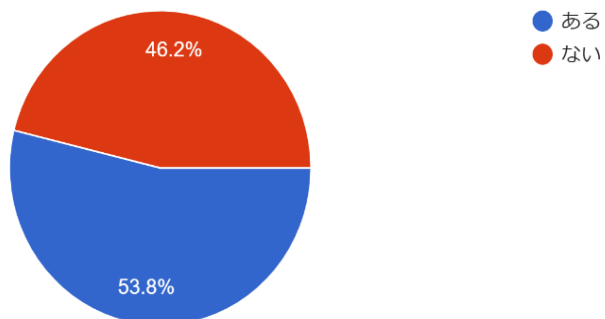
② ふれあいひろば利用アンケート

ふれあいひろばを一定期間利用した、あるいは現在利用している児童13人を対象に、ふれあいひろば利用アンケートを実施した。アンケートの結果は以下の通りだった。



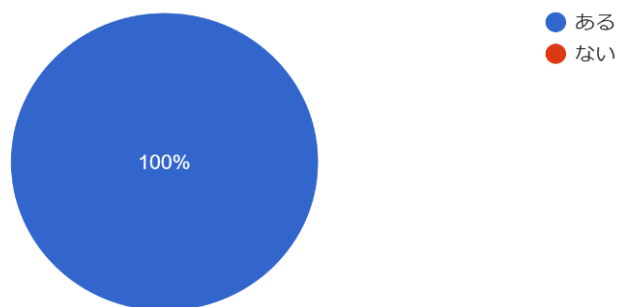
3. ふれあいひろばで、友達と遊んだり話したりすることがありましたか？

13件の回答



4. ふれあいひろばで、先生と遊んだり話したりすることがありましたか？

13件の回答



5. ふれあいひろばで、しっかりと学習に取り組むことができましたか？

13件の回答



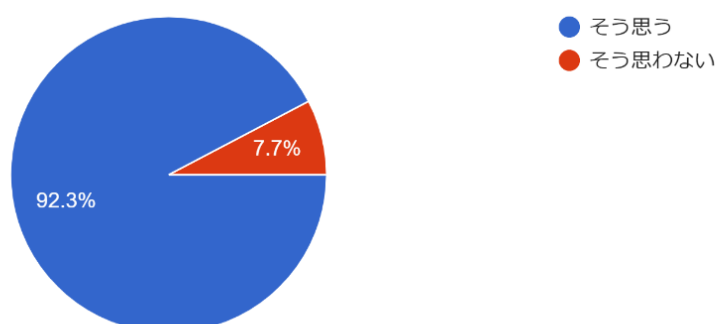
6. ふれあいひろばは、安心して過ごすことができる場所でしたか？

13件の回答



8. ふれあいひろばには、自分の居場所があると感じましたか？

13件の回答



以上の結果から、ふれあいひろば利用児童は、概ねふれあいひろばを自分の居場所の一つと感じ、安心して学校生活を送っていることが読み取れる。また、落ち着いた環境で学習に向かうことができていることが分かる。また、児童がふれあいひろばを安心感をもって過ごすことができる場所であると思う理由については、次のようなものが挙がった。

- ・集中できる場所だったからです。・静かで1人で集中して取り組めるから。
- ・集中できるから。・せんせいがいるから
- ・先生たちが分からないところをおしえてくれる。・先生がおしえてくれたから
- ・一人で取り組みやすい。・人がいないからです。
- ・自分のペースで進めるから。・集中できました
- ・オンラインで勉強できたからです。
- ・一人でいられる所で課題や学習をしたくて一人でやっていたら集中ができて次々と学習に取り込んでいった。

このことからふれあいひろば利用児童は、学習環境だけではなく、ふれあい推進員等教職員による個別の支援や温かい交流によって教職員との信頼関係を構築していることが明らかとなった。ふれあいひろばに居場所をもつことで、安心感が生まれている様子がうかがわれる。

### ③ MLB 教育に関するアンケート

6 学年を対象に行った MLB 教育（アンガーマネジメント）において、学習を実施した後に自分の怒りの感情に対してどのように対処するのかについて、アンケートを実施した。結果は以下の通りである。

#### ① 授業を受けた後にイライラすることがあったか。

はい	11人
いいえ	22人

#### ② イライラしたときどのような対処をしたか

自分の好きなことをする	3人
心の中で収めた	4人
仕返しをした	2人
時間を置いた	1人
深呼吸をした	1人

#### ③ 今後イライラした時にはどのような対処をしようと思うか

深呼吸をする	16人
好きなこと・楽しいことを考える, する	4人
ストレッチをする	1人

この結果から、児童はアンガーマネジメントの学習に取り組む中で、自分の感情をコントロールするための方法があることを知り、これからの生活に生かそうとする姿が見られる。特にコミュニケーションに不安を抱えている児童にとって、具体的な方法を獲得できることは、今後の人間関係づくりに役立つのではないかと考えられる。

## 6 研究成果

### (1) 児童の実態把握と組織的な対応についての周知・徹底

学校生活アンケートを定期的実施することによって、表出していなかった児童相互のトラブルを発見、解決し、それによっていじめに発展することなく収まるケースが多くあった。児童がおかれている状況を確実に把握していくことは、いじめ等の防止にとっても有効であった。また、学校生活アンケートについて児童に聞き取りや指導をすることで、児童は「先生が話を一生懸命聞いてくれた。」「先生が自分を守ってくれた。」という感情を持ちやすく、教職員と児童との信頼関係を築く機会にもなったのではないかと考えられる。

一方で、学校生活アンケートは児童の自発性が必要なため、全ての困りごとが把握できているとは言い難い。実際に、児童が一人で悩み続けているにも関わらず、発覚が遅くなり、対応が遅れてしまうケースも起こっている。アンケートのみならず、教職員が常に児童の様子に目を配り、見守っていく体制が重要であると考ええる。

### (2) 児童の居場所づくりのための取組の実施

今回の調査によって、教室に入るのが難しい児童にとって、ふれあいひろばが居場所の一つとして有効に機能していることが分かった。不安を抱えながら学校生活を送る児童にとって、教室以外に拠りどころとなる場所があることは大切である。また、ふれあいひろばで、他の児童や教職員との温かいふれあいは、児童の大きな安心感となっている。

ふれあいひろばで1日過ごしていた児童が、教室復帰できたケースもいくつもあった。安心感が土台となり、次へつながる意欲を育むことができたのではないかと考える。

### (3) いじめ・不登校等予防的生徒指導の実践

MLB教育を実施することで、多くの児童が怒りの感情をコントロールする対処法を学び、実践しようとしていた。また、このことが、よりよい人間関係を築いていくために大切であると多くの児童が感じていた。児童のコミュニケーション能力の低下が懸念される中、他者との接し方を学び、実践していくことができるように支援をしていくことはとても重要であると感じた。

児童のコミュニケーション能力を含む他者とのかかわり方を学ぶ機会は、学校生活の中に多くある。MLB教育のように学習によって獲得することはもちろん、今後は生活の中の様々な場面を他者との人間関係を学ぶ場として捉え、ライフスキル教育を推進し、安定した人間関係の中で、安心して学校生活を送ることができ児童の育成を図りたい。